

平成23年度 自 己 評 価 表

鳥取県立皆生学校

中長期目標 (学校ビジョン)	学び、輝き、感動のある学校 幼児・児童・生徒が充実した学校生活を送り、個々の可能性を伸ばし、より良く生きることができるよう支援する学校 《 18歳で自立できる人を育てる 》 ～社会に繋ぎ時代を生き抜く力の育成～	今年度の 重点目標	○幼児・児童・生徒の能力・特性に応じた指導の充実を図る。 ○幼児・児童・生徒の可能性を伸ばし、社会参加していく力を育てる。
-------------------	--	--------------	--

評価項目		年 度 当 初			中 間 評 価 (10)月		
		現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
一人一人に視点をあてた学習指導の充実	幼稚園部	●PCDAサイクルが機能し、学期ごとに指導が改善しているか。	●学期ごとの評価等で個別の指導計画を見直す機会が少ないために、PDCAサイクルが循環していない。	●実態把握から浮かび上がった個の課題から目標設定を行う。	●自立活動チェックリスト等を活用しながら、幼児一人一人の課題を整理する。 ●評価会等を通して、個の実態を見つめ直し、目標や手立てを改善する。	●学期毎の評価会を実施した。幼稚園の教育課程に準じた指導に向けて動き出している。	C●評価会や幼稚園視察などを継続実施する。
	小学部	●課題となっている授業の学習指導が学習指導要領に則した目標や内容で行われているか。	●教育課程の改善に取り組んできている。それを授業として試行錯誤しながら実践しているところである。	●類型別学習グループで課題となっている授業の学習指導が改善する。	●類型別学習グループで授業づくりの研修を深める。 ●研究・研修課と連携して、学部研修の中で課題となっている 授業を取り上げて実践報告や検討会を行う。	●学習グループ毎や個人単位で試行錯誤しながら授業を改善しつつある。	C●学習グループを中心に授業公開及び授業研究会等を実践に活かす。
	中学部	●定期的なT T会や内外部機関のアドバイスを受けながら授業改善を進めたか。	●T T会等、授業の打ち合わせや評価をする時間を十分にとることができなかった。 ●生徒が学習しやすい環境づくりや姿勢についての支援、主体的に活動できる教材や補助具等、改善の余地がある。	●定期的な授業反省と校内研究との連携により授業改善が行われている。	●授業評価の工夫や定期的なT T会を実施する。 ●授業の問題点を明確にし、改善・実施したことに対して自立活動部・教科等指導部・外部専門家よりアドバイスを受ける。	●定期的に学習グループのT T会を行った。まだ実施されていないT T会は会議を精選しながら実施する予定である。 ●本校エキスパート教員からのアドバイスを受け授業改善に努めている。	C●T T会がPDCAを意識したものになるよう努める。 ●校内研修や研究で取り組んだことを各授業で実践し、積み上げていく。
	高等部	●障がい特性を考慮した授業作りができたか ●専門教科に関する指導は充実したか。	●障がい特性に応じた指導をするために、担任、授業担当者間の連携ができつつある。 ●新規の専門教科設定に伴い、指導内容の検討や教材開発が必要である。	●個々の生徒について、各授業等の連携イメージができている。 ●専門教科の指導計画が整理され、地域資源を活かした授業を実施している。	●個々の生徒の指導チームによる指導に関する検討会実施と、授業作りのための授業公開実施。 ●3年間を見通した指導計画の検討。地域の企業等との連携を進める。	●個々の生徒の授業担当者で指導について検討を重ねている。 ●外部講師が上手く活用できている。	C●各生徒の授業連携図の作成研修を行う。 ●専門教科の学習内容を整理し、年間計画案を修正する。
18歳の自立を見据えた進路指導の充実	幼稚園部	●個別の教育支援計画・進路指導計画との関連を意識しながら、指導を行ったか。	●高等部を卒業した後の幼児・児童の生活するイメージが曖昧である。	●高等部を卒業した後の生活をイメージして、個別の教育支援計画に活かす。	●卒業後の生活をイメージすることの大切さを学部会等で話し合ったり、個別の教育支援計画の検討会での話題としたりする。 ●3年間を見通した指導計画の検討。地域の企業等との連携を進める。	●個別の教育支援計画を個別の指導計画作成時や日常生活で活用できつつある。進路指導計画の作成も評価できる。が、実際の指導への活用は充分とはいえない。	D●日頃の授業に進路指導計画を活用する方策を考え、実行する。
	小学部	●自立と社会参加する姿を意識しながら個別の教育支援計画を策定しているか。	●高等部を卒業した後の幼児・児童の生活するイメージが曖昧である。	●高等部を卒業した後の生活をイメージして、個別の教育支援計画に活かす。	●卒業後の生活をイメージすることの大切さを学部会等で話し合ったり、個別の教育支援計画の検討会での話題としたりする。 ●高等部の進路担当教諭にも参加を要請し、話し合いを深めるようにする。	●個別の教育支援計画を個別の指導計画作成時や日常生活で活用できつつある。進路指導計画の作成も評価できる。が、実際の指導への活用は充分とはいえない。	D●日頃の授業に進路指導計画を活用する方策を考え、実行する。
	中学部	●教育支援計画や進路指導計画を活用して、個に応じた指導を進めたか。	●中学部段階でどのような力を身につけていけば良いのか不明瞭などところがある。 ●生徒の実態を考えながら指導を行っているが、進路指導旬間等で、もっと個に対応した指導が必要である。	●進路指導計画が実効性のあるものになっている。 ●進路指導旬間等で個に応じた指導が行われている。	●進路指導計画を練り上げ、その内容を日々の生活で取り組めるようにする。 ●個のねらいや身につけさせたい力を明確にし、進路指導旬間の指導に取り組むようにする。	●生徒に応じて前期進路指導旬間の学習を設定した。複数日の体験も設定していきたい。 ●個のねらいや身に付けさせたい力をどのように設定すればよいのか学部研修を行った。	C●進路指導計画をどのように各種計画に繋げていくか検討し提案する。 ●研修と前期進路体験の反省を生かし後期進路体験を設定する。
	高等部	●教育支援計画・移行支援計画は充実したか。	●教育支援計画作成の会を実施し、内容を検討しているが、十分とはいえない。 ●移行支援計画について書式、活用方法の見直し中である。	●支援計画活用のイメージを持って作成することができている。 ●移行支援計画活用の流れができている。	●支援会議や支援計画活用の事例をもとに学部研修を実施する。 ●移行支援計画の書式の整理、教育支援計画からの切り替え時期の変更。	●卒業後の生活を具体的に知るために、卒業生の追指導や高3の進路状況について研修を実施した。	C●在校生の支援会議・支援計画についての事例研を実施する。 ●移行支援計画の作成・利用方法を検討する。
ニーズに対応できる専門性の向上	幼小小学部	●自分自身の専門的な知識や技能に気付き、それらを発揮することができたか。	●求められる専門性を肢体不自由教育のそれだけと考えてしまうところがあり、小学校教育、知的障がい教育や豊教育等の専門性を持つ者が力を発揮しきれていない。	●自分自身の専門性に気付き、それをそれぞれがグループ内や学部内に広める。	●教師に求められる専門性の内容について理解を深める機会をつくる。 ●研修等で新たに身につけた専門性を全体に広げる機会を作る。	●専門性に関して自分自身をふり返し、研修会等で身に付けた専門性を活用しようとしたり、相互補完しようとしたりしている。 ●専門性の定義が曖昧である。	C●個々の専門性について整理し、それを学習グループ内や学部内で研修し合う場を設定をする。
	中学部	●実態把握のツールを利用しながら目標設定をおこなう。	●実態把握が担任の主観になることが多く、目標の妥当性を上げる必要がある。	●実態把握の段階から複数の教員で話し合い、目標を設定することができている。	●実態把握や目標設定、個に視点をあてた研修を学部で実施する。 ●諸検査を実施したり、自立活動チェックリスト等を活用したりする。 ●実態把握から目標設定まで、複数の教員で話し合える機会を設定する。	●自立活動チェックリスト使って実態把握をしつつある。 ●実態把握について話し合いの場を設定することはできた。今後も継続して行っていく。	C●校内研修を生かし諸検査を実施する。 ●実態把握をどのように目標設定に生かすのか学部研修を行う。
	高等部	●アセスメントに関する知識・技術を活用できたか。	●個々の生徒の実態把握のために、検査やチェックリスト等があまり使われていない。	●検査等を実施し、客観的な実態把握ができるようになる。	●検査に関する学部研修を実施する。 ●個々の生徒に適した検査等を実施する。 ●個々の生徒について、アセスメント、授業作りのためのミニカンファレンスを実施する。	●生徒の実態について学部研修の機会などを利用して見直したことで、授業改善に活かされつつある。	C●検査結果や授業への活かし方等についてのミニカンファレンスを実施する。

評価基準 A：十分達成 [100%] B：概ね達成 [80%程度] C：変化の兆し [60%程度] D：まだ不十分 [40%以下] E：目標・方策の見直し [30%以下]